後撰集新抄 秋上

和書門
二七三九七號
九〇函
二架
八冊
類

内閣文庫
和書
二七三九七號
二〇〇函
八冊
七架
類

内閣文庫
番號 和 27397
冊數 8 (5)
函號 200 35

国立公文書館
National Archives of Japan

明治十[illegible]年購求

後撰和歌集巻第五新抄

秋歌上

惟貞(是貞)親王の家の哥合に。　よみ人しらず

○一本に。是貞と作る方然るべし。是貞親王ハ。光孝第二の皇子なり。此哥合の哥。古今にも此集にもあまたみえたり。

にはかにも風の涼しく(ふき来る)なりぬるか(ゆくる六帖)秋立日とはうべもいひけり

○一首の意明かなり。金葉秋「とことはにふく夕暮の風なれど秋立日こそすゞしかりけれ。うべを詠みて。これをげにと詠なせるなり。古今秋上「吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらん。など皆同じ。

題しらず

うちつけに物ぞ悲しき木の葉ちる秋の始を今日ぞと思へば

○木葉も落てさびしくなる秋の初を今日ぞと思へば。ふとさし向く
まで。まづ物悲しく覚ゆるとなり。うちつけには。ふとさし向ふさ
まなり。古今物名「うちつけにこしとや花の色を見ん　おく白露の
そむるばかりを。など皆同じ　・此歌などのてにをは。末句より上へ返してみればきこえやすきなり。此格の歌
ども。詞のみ諸巻二に。古今六山里は「冬ぞさびしさまさりける「人目
もくさもかれぬと思へば。拾遺八大井川河辺の松にこととはん「かか
るみゆきやありし「むかしも。古今二「此里に旅寝しぬべし「桜花
ちりのまがひに家路忘れて。なといと多く出さば。すべて。てにをはを
はの辞にて留りて上へかへる事の歌ぞ。いづれもこれ。其留りので
にをもの。かならず上の詞の切れて下までへ下やうにはよむず
なり。歌によみげる歌どもを考ふべし。皆「の点より「の上へ
かへり。「は諸の切れて下の志なり。然るに後世には。此格を
志らで。留りのてにをはを。其初句の詞などへのみかかりて。其詞
の切れて下までへかからぬ歌ども多きを。皆むかしことなり。すべて元の
詞へはかからぬも難にあらず。ただ切れて下まで へかかく
らざれば。一首の趣とのきこえんとあるべしといひつべき

物思ひ侍るころ。秋立日。人に遣はしける

○意のよふにて。人のつれなき中恋の物思ひなり。詞書にて志
らるべきなり。

君のえてこし君もつれなし秋風は今よりふきぬ我身悲しも

○此年月我に物思はせ来つる君もつれなし。其上に君の我を厭さ
ることいふもいちじるく。時ぞともいふ詞の秋風も今より吹初る。
さらに我身ハモウ悲しきうへなるよしなり。

思ふより侍けるころ。

いとどしく物思ふ宿の荻の葉に秋とつげつる風のわびしさ

○かく物思ひをして居る宿の荻の葉に。物悲しき時節の秋になりゆく
事ぞと告ぐる風が。殊更にわびしきよしなり。初句いとどしく

是末句のわびしさへかけてみるべし。

題しらず

秋風のうちふきそむる夕暮（ゆふぐれ）はそらに心ぞわびしかりける

○おほぞらにふくなどは何となくわびしきなりと也。わけてそらに何となく空にみゆる事もなくわびしく思ふ事なり。此そらにと云詞を俗言にメッタコクウ（虚空）ニと云言葉やうなり。萬葉集に霧たちわたる方をながめつゝそらなる心も我はするかなと詠るなど何となく思ひさだかならぬ物なり。然れども空とはいふにもやくやく落つる詞なり。万葉集には心空なり土（ツチ）はふめどもといふ歌あり。範麻呂云そらの事は其処などいふ空の事まで空虚（ウツソ）などの虚（ウツ）にて其（ウツ）とかけたる事なる詞なり。

大江千里

露けくて（かけし 天）（わびて 六帖）我衣手はほすまもなき物を（あるものを 一本）など秋風のまだき吹くらん

○意は秋来て、まださほど寒からぬ時ぬらしほしたる袖をほす間もなき程なる物をいふで人の心には、まや秋風の吹くらんといふ心なるべし。又思ふに此作者の歌には詩句の心をよまれたるもまゝ見ゆれば、ほしきれざるなどある歌にやとも思へどもまだ思ひ得ず。

つらき○顕云。多月ばかり。業平朝臣の作に思ひまじりて侍ける。女。

女のもとよりふみ月ばかりに思ひおこせて侍る。

よみ人しらず

秋萩を色どる風のふきぬれば人の心もうたがはれけり

○古今に 意「秋風に山の木の葉のうつろへば人の心もいかゞとぞおも

つゝけ。詞云みちも
との秋かの朝臣。
時々まうかよひ
ける時に。毎月四五
日ばかりに。なぬか
秋日の料に。さうぞ

ふ。

返し　　在原業平朝臣

(秋の野を大和物語)あき萩を色どる風はふきぬとも(まだくとも一本)心はかれじ草葉ならねば

○古今五恋 人を思ふこゝろの木の葉にあらばこそかぜのまに〳〵ちりも

乱れめ。此二首。大和物語にハ見えど。その内侍といふハいまそうけ

るとくの。源の除に。おなじ内侍に宮中ぬすみける時。中納の色をゝに

よみてやりける。秋ちぎをいろどる風をさ云ゝと伝りたるだにいへし。

秋の野をいろどるとしとよめり。

源昇朝臣。時々万りかよひける時に。毎月の四五日ばかりにな

ぬこの秋日のまゝに。さうぞくしてとひつゝして待けれ

ぞ。

くてうじてとぶらひ
おこせて侍れば。

○なぬかの秋日の料にハ。七月七日の衣料になり。さうぞくハ。装

束。てうじてハ。調じてなるべし。上巻中に已に見え。紫家

調じてとふくをこそ。調じてくるしといひおこせさるなり。かくさま

に物るさをふく見て。又などし多くさることに多く。又と物

などにハかぎらず。どひさして色々あくしかるさきくさぐさあ

るなり。さて詞書にも。清見ぶにも。物語などの人と人と相

とひこのそれ所の詞中もいと多し。さあるにあさざひて。よくく

しこつるべきるなり。

宗院

あふ事ハたなばたつめにひとしくてたちぬふわざはあへずぞありける(一本)

○君に逢ふのまれなる事ハ。織女にひとしくて。衣を裁縫などする方

のわざを織女のよろしき事ハあやかり侍らぬぞとなり。たなばた

つめを。棚機女とて。つハ助辞なり。たなばたつめ織女なり。後世の俗に。七夕と

かざる数のことをあるぞ。かきて。タナバタとよ

むかしごとき非なり。二星を祭るは。七月七日の夕なるによりて。七
夕歌と万葉などにもよめるを。今は撰ぶるものなり。又たなばたと
いふは。此たなばたつめを略きたる詞にて。即織女の事なり。万葉に
も。織女をたなばたとよみたる所あり。此たなばたといふをも。後世
には。二星に通はしていふめくれぬる人の詞なるも非なり。然
れども。かくいへるは撰まるゆゑは。七夕の祭は。すべて婦人(フジン)の織縫(オリヌヒ)など
の手業のうへにするわざにて。おほやけにも織女を祭るわざなれば。いふに
も。たなばた祭といふより。おのづから二星に通はして。たなばたと
いふもののめくなるを
なりぬるなるべし。　さて。織女は機織るわざをつかさどるといふよ
よりて衣縫(キヌヌフ)わざにもいへり。万葉十「いにしへゆおりてしはたを此夕
衣に縫ひて君まつ我を「足玉も手玉もゆらにおるはたを君が
御衣(ミケシ)にぬひあへんかも。などもありて此集などのころとなりて
は。もはら裁縫(タチヌフ)わざにいへるとおぼしき事。本集にもそのたぐひの
たちぬふ方をのみ見えて。ちぎりまさぞ多かし。なども見えたり。ぬ
えぬ。俗にあやなるといふに同じ。やがてあやにくるともいへるは。拾
遺雑恋に「風ふきをいふ菅原のとも

すさぞなやありやすきを　日本紀應神の(傳寫)に。宵此云阿蔽(アエ)とありて。古
とのころゝ。ともあり。
今集の一本(秋上)。又新撰六帖に「こよひこん人にはあはじたなばたの
ひさしきほどにまちもこそすれ。貫之集「ひさにこぬ人をまつよは
えぬらんとおもへの意と我はなりぬる。伊勢集。甲斐へくだる人に「君
がよそに侍るの都にあらでさだめなきせのうきおもひもおくるゝ
どおぼゆらし。

題しらず　　よみ人しらず

天川わたらん空もおもほえずたえぬ別と思ふものから

○七夕の後朝の意を詠也。今かく別ても。年々来べき。絶ぬ契に
ていへる常の別ぞとは思へども。さしあたりて。天川を渡てかへらん方
を。そらとしも覚ぞ思しとなるべし。渡らんそらは。渡るべき方

を其所としも覚えぬ定と云也。若紫巻　尼君のいとよわくなりたまひて。紫上君のいとけなきを。見おきてや身まかりなんと。なげきたまふところに。「おひたゝんありかもしらぬ若草をおくらす露ぞ消んそらなき」と侍るなど似たるきびさまなり。考へ合せてさとるべし。かく此抄に。詞の類例など引出るかき。歌どもを集などにあるもあるべけれど。ふと思ひ出るまゝ抽すれど。いとときを引よせるもある。筆しらん人いそくなとがめそ。

つらゆき抜云。七月七日に。夕かたまでこんといひつかはして侍る人の許に。雨ふり侍るまゝかくていひやりける。

七月七日に。ゆふ方(さり)までこんといひて(おくり一本)侍るに。雨ふり侍れば。

までこそ。

源中正　藤原忠国一本

雨ふりて水まさりけり天河こよひはよそに恋んとや見し

○一首の意は明らかなり。但こよひとといふに力あり。二星ぞ逢ふとよふ秋なればこよひぞ必と思ひつるにといふ意なり。

返し　よみ人しらず

水まさり浅き瀬しらず成ぬとも(らん 異)天のと渡る船もなしやは

○天のとは、空のとを水門(ミナト)に見なしていへる事。古今秋上に「秋風に声をほにあげてくる舟はあまのと渡るかりにぞありける」などのためし。されど此歌にては即天河の川門(カハト)のあたりにいへるなり。一首の意は。雨のふり水のまさりて。かねてより渡らん浅瀬はしらずもなりぬとも。彦星のぬるふに。天の川門を渡る舟はあるべきものをの義となり。雨にかこつけ来ぬぐらゐをしきといふ意をふくめたるなり。此二首は。我中を二星にならぞへていへるなり。

なぬかの日に。女のもとに遣しける。　藤原兼之

ちぎりしもあふ秋ありけれ天の川此わたりにぞわたる瀬もなし
○此わたりを。此あたり（此所等）といふに同じ。彼方を云るなり。此歌ハ天河を隔て。年にひとたび逢織女も。今秋七月七日といふ年に秋ハあふよしを。経るを此我等が中にも年経てあはず。織女にもおとりたる中なりといふなり。
（このきうたになりよめる矣）かしこにやる男の。七日は秋まできたりけれど。女のよみて侍る。
○上ハ男のといふなれど。女の云ことハなくてすべしと。詠み給へるなり。

読人しらず

ひこ星はまれにあふ秋のとこなつをうちはらへども露けかりけり
○牽牛のあふ稀に来あひて。かく年に秋の床なれバ。今までも長く逢ハぬ方に流しつる涙にて。今さらに拂へども猶露けきよしを詠るよしなり。此歌孟津抄 篁本世「うち拂ふ袖も露けきとこなつに。あらしふきそふ秋も来にけり」とあれば。又末句「うち拂ふ袖も」とあり。さる本もありしなるべし。季吟法師の抄に。まれに逢秋の床ハあふにつけても袖ぬるゝ心なり。床夏を床にそへて露も縁ある詞なりとあるは。此孟津抄の方は末句にかなへり。瞿麦を床にそへよせる事。古今集「ちりをだにすゑじとぞ思ふ咲しより妹とわがぬるとこ夏の花」などにかないと多かり。

牽牛星をひこ星と云は。和名抄に。爾雅注云。牽牛一名河鼓和名比古保之。又。織女兼名苑云。織女牽牛是也。和名太奈以奴加比保之。八太豆女とあり。かくて。ひこハひめに対へて。貴人の稱なれば。古事記日本紀など小。神の御名より初めて。いと多くそへたるお。もぶきみてゆるこのなり。二星の交会といふ事を。男女のなからひのぬくいひなしたるより。皇国の貴人の稱のひこひめにあてて。

夫星ときこゆるものとみえたり。これは彼の事はつらぞはいふ乃ぞ

なり。

なぬか人のまちより出すはにむかひあそんといひおこせてきく

ちかれぞ。

○これ七日とかはりて。なぬかのはひとよむべき綫。後世なまりてな

ぬかと写なせるなるべし。一本にはこれ。七日の秋とかけども。なり

によるに。秋のことゝハみえしぞ。なぬかやうかはうは。むかし

る詞なりと。縣居大人いはれ。此類はつゝにおなじく。このみん

にて。歌かは此とかふ。即字とうけるにそあらざるべし。附屋

大人もいはれたり。古今集の詞にも。なぬかの

日の秋よみける。とあるをも。引合せて思ふべし。

こひしくてあそんと思ふ夕ぐれはさらぬだに清きもかくやあらむし　ぞ一本　伊勢集

○一首の意明らかなり。

かへし

まどひなれものとはむこそなかりぬべきたなばたはえハ人目やハとふ　伊勢集

○織女は稀にはあへど。人目をば憚りぬを。我はまれにあふ人に。人

目をもはゞかるぞ。わびしきも織女にもまされり。よりてたゞひも

なきものといひやりになしてんといふなり。○人目をさるは。とよいふ詞のことにて。すさに妾

くらふべし。

題しらず

天川ながれてこひぞうくもぞある何されと思ふせりさやくあそん

○折を待ながらして。そのこ思ひて月日をおくりながら。をしきせに

あらんをきてまどんさありにてぞ悪くすれぞ。今かくあひれも逢ひさ

きすりやと思ひつゝ侍る時には。早く逢らんとなるべし。上二句ハ。

織女のぬくに月日をおくる意なればといふなり。さて、みづからは意の心
なり。（織女の心になりて よまれたりは非ぞ。）おのれてハ長緒(ナガラヘ)の絶ゆるにて。月日に
も年月なれども長く経るなり。（天川の縁にて、流てりけるを備なし。）あまれとは
ふせにとハ、此方はあく見渡し思ひつつるる。其時にとい
ふなるべし。（向(サキ)の人のあまれと思ふ意にはあらじ。）
かくさ方ハいへるせをさしある
なる其時宜をいふなりけり。きせうきしきせあふせなども皆同じ
文新古今夏に「きうれしとも、ころをせにせん」新古山田は原の杉の村
だちとあるなどもいさゝか異なる語ひざまにて、ころを其所(ソトコロ)に
せんといふに近けれども、其との意ハ一つなり。（云句、その様をかりておして
かりて、あやぶむ意のてふをさなり。其のぞと一つなくおろ。意のちる
なり。結びそ其のぞに同じ。但しんと結べる例まれし。せんなどく
べき所をも。するとやうにむすびしうと。玉緒巻三十九葉
に委くみえたり。もてそのつかひざまも、此をそにおなじ。）

玉このづらきてぬ物からたまはししのころは其じ一秋のと（さぬる秋を云能）
○万葉十に出たる。七夕(ナヌカノヨヒ)は歌にて、三四の句「さぬらく八年のころり」に
とありて、二星の契を絶さる物からきて寝(サヌ)る事ハ一年はるを
意渡まそ、たゞ今秋一秋のことなりといふなり。玉篇ハたゞぬとい
ふ料の枕詞なり。年はころりとハ、織女の一年は身を意にする
をいふ。同巻(万葉)に「年にありて今宵のまくらんぬ秋のよぎりがく
るに、とありけままはけ残。又「年は意こよひけして所まよりきつまの
ぬくやわがころひをらん」などいへるも、一とせ意にするをいふなり。
かくて、四句万葉に、年はころりとあるぞ正しき。をしハにをは(ニ)(歧)と
写誤まるにも所らんか。又思ふに、此集の比となりて其。年はころり
といふを、解云はぬくなりけるさ方（次下に「年はころりにありぬ物を」とある其も合せて思ふべ）

し。なきばをゆるりはとありし中もあるべし。

秋の秋のこゝろもまたくいはざるにあへることよひまはざもあるらん

○秋の秋ままきをのぞといふ一字ともげふと灼然(イチジルク)知らるゝやうに織

女まちひる今秋は不明(アケズ)もあれかしとなり。

契りんこと乃葉今まかへしてん年まつるりによりぬるその哉(一本かし)

○例の我が意の言なり。まくんかなるらじ。まぢく逢はんすべく契りて

ひさる言葉をきゝやこたへしまゐらせん。今は契るかひもなく二

星の一年の間に只一度逢ぬくなる中になり果るものをとなり。

初句契りんといへるを、今は契るかひもなくなり果るなり

のすなれば、まかくとやうに契りひさりしやぶれるが、甚言葉はな

どいちんがめく、わざとおぼえきたるさまにいひさるものなり。此

歎いと多くありて、おもしろきいひやうなりんをつくべし。さて

○此末句よりぬるとあるを、もしは、なりぬるのなをよふ見誤まれる

この文字を与、与などの文字を与与などに写しひがまれるにてもある

べし。 甕麻呂云、此末句誤にはあらじ。本のまゝにてよろしかるべ

しさるは、年の渡に片づきたるにて、寄(ヨリ)ぬる帰(ヨリ)ぬるなどの義にて

成(ナリ)ぬるといふに、いくばくも違はざる言と聞ゆ。俗言に、年が寄(ヨツ)たと

いふと、老ニ成(ナツ)たといふと同様なるをも思ふべし。将俗もあるべけ

れど、今ふとき思ひ出ぬといへり。 師云、げによると云言はつくと

言と同じきにて、秋になるを秋づくともいへば、此より(寄)ぬるの説もよ

ろしかるべし。されど又上のなの誤ならんとの説もすてがたしと

いはれたり。

なぬかの日。越後蔵人に遣はしける。

○越後蔵人は女蔵人(ニヨクラウド)なり。

藤原敦忠朝臣

あふことはたよひるなば年にぞあるにおとりやしなん逢はまさりて

○上句は。二星すら年に一夜の今夜だに逢ふなればといふ義なり。おとりやしなんは劣(オトリ)や為(セ)んといふに通し。素性集。すれなきバゆるしと思ひしたがふるに今はおとれる身をいかにせん。

七日乃日。

よみ人しらず

まれなるは天のとわたる今夜さへちかき人のつれなかるらん

○かの人乃出て逢事なきは遠方なるが。二星だに逢ふといふ今夜さへ。近くまで来てつれなきはうらめしとて。さて猶つれなきをすかなふるかないので。かくまでえてつれなきはうらみんとて。さて

もとよりなどはんとけるさまを見せよかし。といふをふくた

するなり。上下の句の首に。いので。と云事を加へて。よく格なる事。上に

いへるがごとし。さるは。此句をちかた人の。此の文字に甚力ある所なき

ぞなり。

三句の。さんきおとしつれなきがうへに。今夜もまたといふ

となり。万葉に。副の字をサヘとよみたり。もとよりあるがうへに又

添ある意の詞なきぞなり。古今上。春霞たおしてたなびくぞ。ならぬあすさ

へふらば若葉つみてん。とあるなども。すべて皆同じ。さへの詞を。すべ

へに。又。彼(カ)も。もひくまるやうの

となる事。玉霰にいちまるがごとし。て此事のあるう

らに彼人(カノヒト)といへるがごとし。をちこちも。彼方(ヲチカタ)此方(コチ)にて。かなるさなると

いふに。同じきすが万葉に彼此(ヲチコチ)とあるもて。心おえべし。此をちこち

かなるよりなどに。遠近の意とのえんは。猶まる人もあそりをちて

ちと対へいふ時ぞ。げにおのづから。遠近の意にもきこゆれども。さりと

て。をちは遠。こちは近なりとみゆるは。非なり。されど此所

などのを。遠方人とえてきさらにきえたり。よくよくみるべし。

七夕をよめる

○此詞ハ万葉にハ七夕とのみ書て、それをナヌカノヨヒとよむ事なり。今此所に七夕をとあるを、織女(タナバタ)をとこゝろのめく説えて、おしはかりゆへず。七夕とかきて、タナバタとよむ事の誤なるを上に多くいへるがごとし。これも七夕にとありしを、後にをと写誤まる事もあるべし。但しかくてもナヌカノヨヒヲとよむよし、此集にもあれども、ナヌカノヨヒ（万葉に詠）ヲといへぞいはんよりは、七夕にといふべけれぞなり。（旅云なり。露を詠、蝉をなどあるとも実なり。）

天河遠き渡りハなけれども君が舟出ハ年にこそまて　よみ人しらず　朗詠集

○此歌万葉巻十に出たり。君が舟出でハ、牽星の舟出なり。織女の心になりてよめるなり。遠き渡りハあらざれども、君がたやすく舟出し給ふをバ一年がまりて待といふ事なり。同巻万葉に「言よりそらにやみわたらせ一とせにふたゝびのよ君なくなく」。此巻八に「袖ふらぞ見ゆもかはしつべく近けれど渡るすべなし秋にしあらねば」などあるをも引合せて見るべし。

あまの川岸にて波乃たちゐつゝ秋の七日のけふをしぞまつ

○織女の立て見居て見七月七日を待となり。二句つゞきの辞也。頻(シキリ)に立居して待まぶる心を見えてあはれなり。初二句ハ序ながらよせあることを以てあやとなるなり。拾遺秋「秋風に夜のふけゆけハ天川かはせの波のたちゐこそまて」

紀とものり

今よりハ天のかはらはあせななんそこひともなくたゞわたりなん（よむとも六帖）

○今日よりハ天川ハ淺くなれかし。わたるにあせらずぞ。ふよ橋よなどいふ
労もなく淵瀬をもたどらずして、やすく直渉(スグワタリ)にわたるべくかちより
渡らむとぞ思ふをいふなるべし。　初句今日よりハといへるは。七日
の秋に二星の逢ひて別んとする折に。天川のわたるにあせらぬ故。此
後もかくわたるべく渡来てあひみんをと云意にて見ゆるな
り。此句今日よりやとある本もあれども。異本又一本六帖家集わ
どにも。皆よとあり。万ことにやとてにをはとしのちぎれもき
こえてやハ誤なり。此の方を用ふべし。　天の川原ハたゞ天の川の
事なり。万葉一巻 などにも海原(ウナバラ)國原(クニハラ)ともありて。はらとハ廣く平らけ
き所をさすべて云事なり。原字に従て原野の事とのみ思ふは誤なり。
此世ハ淺く變(ナ)るを云。今の世にてもいへる事に同じ。なほ万葉巻

六帖。はるくもわたりて見てしが神名火の淵はあさびて瀬になる
らんとあるあさびと同意なり。　四句。そこひさ。水の下底(ソコヒ)にて。そこ
ひともなくハ水ありともしらず見ゆべしといふなんがめし。　さて此四句。
行成卿の筆と見ゆる本ぞそこよみともなくとあるもよし。為家卿の
正義と見えたり。家集の異本にもそこゐともとあり。六帖にぞ　よど
むともなく家集流布のかすにハうき瀬ともなく家持集といふものにぞ
淵瀬ともなくとあり。二条家於本といふにも。淵瀬ともとあるよし
なり。淵瀬ともとあるハ中にわたりゆれども今ハ本書の歴ひに従
ありかくてもたえざるなり。然れども僻按抄に異本そこゐともなくと
云説を可用。そこゐとハそこよ水とまわたりくなんと云んといふ。但
志後行成大納言筆を見るに。そこよみと侍れば此説につくべしと見

云。正義にも師説云。家本にハ。そこゐともなくといふ説を用侍り。或本
にハ。そこひともなくたゞわたりなんとあり。其ハ水ともなくわたり
なんといふ心を云。但。行成大納言の筆に。そこひともかきたれバ。此説
に付べし。そこひとハ。そこハ水戸なり。そこハ洞のやうな処なり。水戸ハ
水のふかきおきなりとあり。かくて躬恒集に。そこひなくみる君な
まど彦星のたちまち出るころほひすぎして。といふ詞もあれバ。そ
こひといふ詞もよしあるさまにてあれど。此躬恒集の詞ハ。そこよ
水ともわたりとも。そこ水戸のことゝも聞えず。そこ水戸の方へことゝにつゆうぬやうに覚ゆ。
科例もあるべけれど。いまだ見およばざれバ。よくよく考ふべきなり
たゞこゝろハ直渉にて。川の淵瀬をも見わかず。彼方の岸へのぞんざ
して真直に歩行より渡ることをいふ。さるハたゞ早くあひ見まほし

き心より。はやまりにて。身の危からんことなどをも忘るゝさまある
にて。いと心あはれなり。万葉十に上。或本。〔吉隠〕川の川瀬もしらず。たゞわ
たる波にあふ瀬をあゝる君がをも。要之集〔天の川水たゝせる〕かさ
ゝぎの橋をわたしてしがなあふわたりなんなどもみえたり。

よみ人しらず（友則集）

天川なかれてこふるあふ夜ぞしこの渡なるらし秋のしるしを

○初句ハ流てといふなり。料の序なり。なかれてこふるハ。長き月日をこふる
なり。すゞ上にいへるがごとし。

天川せゞの白なみたかけれどたゞわたりきぬまつにかかるしみ（万葉）

○此歌も万葉十に出たり。こは彦星がよみていへるなり。織女の迎
へ舟を待つで。天川の波高きをもいとはで。うちわたり直渉して来

まりとなん。

秋くれば川霧わたる天川かはかみ見つゝこふる日乃おほき　（川にむきゐて）（夜ぞ 万葉）

○此哥も万葉十にあり。こは織女の牽牛を待なり。　句は万葉に川に向居而（ムキヰテ）と有るを。俗人誤まるなるべし。川上といふ事。さしも用なき詞なり。

天河こひしき瀬にぞ渡ぬるたぎつ川瀬に袖をぬらしつ　（ひぢ 一本）

○恋しきせにぞハ。恋しと思ひつゝ見る最中（サイチウ）にといへるなめし。此歌のせの詞のる。上にたぎり川瀬にハ沸（タギ）て流る瀬になり。たぎり川のき文字委くいへり。流るといふも同じく。万葉にたぎち流るゝと云詞もあり。滝を夕ギとよむも。水のたぎち流るゝさまのなきぞなり。これら万葉の假字書に多藝とかゝるべき字をせしるをさとるべし。

たなばたの年とはいはじ天河くもたちわたりいざ乱れなん

○抄にき。七日ばかりと定めずとも。乱て渡らんとなり。思ひ兼ぬる心なるべしと有り。此意なるらんには。牽星のなになりていへるなり。されどかくてぞ。初句たなばたるのといふすいつにか聞ゆるなり。こは織の七夕（ナヌカノヨヒ）によめる己が意句にて。初句を。織女（タナバタ）のかくと云ぞなるべし。織女のめぐ年はまつりとていはじ。いざわたらが待て逢けんと云なるべし。　四句の雲ハたちわたりといはん料にて。末句の乱るも縁の詞なり。　乱れなんとは。つゝしみてゐるもあるぞ。心にまかせて物するなり。古今（三 恋）下にのみこふればくるし玉の緒のたえてみだれん人なとがめそ。などに同じ。

おほし河内躬恒

秋の夜乃あかぬ別をたなばたはたてぬきにこそ思ふべらなれ

○七日の暁の事なり。秋の夜にては。わきてといはん料にてわき別とは。二
星の来年まで逢はざる別といふ事なり。たてぬきにも機(ハタ)の糸に
経緯(タテヌキ)のをみて。さながら乱て。などいはん為めし。貫之集。乱たるに
乱てぞ思ふ恋しさはたてぬきにしておれる我身に。
七月八日のあしたに。　かねすけの朝臣
あかなくにわかるゝ人の天河舟もかよはぬ波もたゝなん
○舟も通はぬなどに波たてば。彦星は帰りの舟かなくて。とゞまり
給はん為にといふなり。新続古今。又兼輔集。たなばたはわたりて後は
天の川波たゝきまで風もふかなん。さて此哥に。たなばたにかへる人に
あしたに　新続古今にも。織女を渡して後。とあるはいかゞ。かならずしもこだはらぬとこ
そあるべけれ。こゝにては彦星をなりしを彦星も織女も二星に通はしてなる

別るゝとよむ事とみは誤する人の写誤するにもあるべし。又まや
く此兼輔の比より。たなばたは。二星に通はしつる詞のやうになりつるに
の哉を七夕とみて。むつばしとも。別るとも。みなさだめてよ
むとなりつるよりの誤にや。
いづれにしてもよからぬことなり。
おなじこゝろを　貫之
あさとあけてながめやすらんたなばたはあかぬ別の空をこひつゝ
○あさとあけてとは。朝戸明てなり。彦星を出しやりて。やがてなごり悲
しくながめ居やすらんとなり。
思ふ侍て。　よみ人しらず
秋風のふけばさすがにわびしきは世のことわりと思ふものから
○三句わびしきは。一本又正義に。わびしきさとある方よろし。こには
又の一本に。わびしきかとあるべし。わびしきはかの誤まで。わびしき

この歌の意なるべし。このほかに思ひつれど。猶一本にははぎとありて。玉緒に
もはぎの方正しきよしをいはれ。正義にもはぎは萩字なり。文章に
云んともいへり。但むかし又こゝと云ん成べし。「夕ぐれは萩吹風の音ま
さる今はたいかにねざめせらるらん」此哥ハ新古今ニ出タリ。後中書王。此哥論を
守みひて。志たし折紙て品文のんなるべしとぞありけるとみえて。此
正義に。縣居大人の書入られたるにも。はぎは又なり。歎息する所を
言詞なり。あはれといふこゝろなりとあるが。あはれの方を専らに心
し。然れども。此哥にをはのうち雍麻呂ハ猶はぎの方よろしかる歟
きよしの説ありて。此説も捨るべくも思はる。其は追考にいふべし。
一首の意は。秋の物悲しくわびしきハ世上の常理(コトワリ)なれば思ふ物な
がら。此秋風のふけばなげかずとも又ひとしく思はるゝとなり。かくてぞ

たゞと云詞を。万葉考別記巻一の。「みよしのゝ山の嵐(アラシ)の寒けくに為当や今夜も我がひとり寐む」とある所に。為云。
そこに為当(ハタヤ)也とありしハ。今夜も果(ハタ)して猶寐んや。といふ意をもて云る
にならず。なほいふべきは。此二字をはたやと訓つ。然れば波多(ハタ)ハ果(ハタ)
してといふ言ぞとすめり。常にはたと当(アタ)るといふ言。行きてし物に当
るゆゑに。終(ツヒ)にといふ事をも。しさて其果してを本にて。さし当る事に
もおしつけていふ事にも轉じし也。巻十八今ノ六ノ巻ナリ。に「さ守麻の袖ふ
る山を越ゆかん日ばかりや君に当(ハタ)に戀ざらん。古今六集に「あひぬま
ば今はたおなじ難波なる身をつくしてもあはんとぞ思ふ。是らは
果してなり。巻十一今ノ十五に「命あらばあはざることもあらん吾ゆゑに波多(ハタ)
奈於毛比曽(ナオモヒソ)当(ハタ)勿念也 命ぶに経ば。古今集に。郭公の初声を聞て。よめる「ほとゝぎす初声
きけばあぢきなくぬしさだまらぬ恋せらるはた」是らハおしつけにといふ

ゆゑ此也同集に風をきゝし人鈴山に鳴なまし我うちつけに恋ます
けりとみゆると右の歌を合せ見よ。はしきは。又てふ云とする人あきど。さらばいづこにてもま
さといふべし。おほよそさると。いへれするは。まことにさするなるべ
きかりき。同じかりぬなり。すれは物又など八きへ
し。然れども俗言には。はるゝと云詞なかれば。どもさてさるゝと又と
の差別そなし。はるゝの詞にあける俗言ハ。又といふより外なる詞がゆゑに。遠
鏡にも皆夕と詠されたるものなり。すべて雅言にては称づてとさも。ども人のちがふことも
俗言にては。一つにいふ事多くありて。俗言に訳さんとするときは。言に
にまひるおもぶきに従ひて。よく其詞勢を味ひ見て訳さしまば。
かなちがへる事なり。此事は遠鏡のそこに見えも。委くいはれたるがゆゑ
し。かくていづれの詞も。其詞の本より委く解く時は。結ぶる末て
の言ても。よくんゆゑまで。実にうへもなくよろしきをは。編者それ
ども。又其の外にけてき。其所に言あるに。よりて。一首につゞまりたる上
みたる。初学びその心ならぬには。たゞしうにんはかりたる紀事多かるものに
なり。其方の歌にては。遠鏡のごとく。よく詞勢をゆゑ。俚言に訳されに
きするすおし。遠鏡ざりにてはいかゞある初学のんゝも。其歌の言をた
しかにんの底には、あらまし。実にはおのが物となる事なり。然れども又

此遠鏡ぶりにのくらゆる時は。或ハ其詞のうつりその末の意を得
しまる此しを見ては。其ものゝ意に老人子共にて。迷ひしく。此所に
老人子共と。彼方にいひうるまでとハ。詞勢の実なるを。其俗語を
ゆて訳しかるすをんぬざれば。いうれとかしぶが俗にふしもある
事なり。さるは。のらと云詞を。ヒタモノとも。常住とも。バツカリとも
訳しなむの言を。ヤハリとも。マダとも訳しする類をいふなり。此俗
言に訳していふと。詞の本よりいふとの二つを。物にたとへていはゞ
玄縣居大人のめでて。詞の本より委く雅言を以て解くハ。玉の有さま
をよく紀示さんとするに。他の玉をとり出て見せむがごとし。さて
よくんゆる時は。いふ方なくよろしきは。編を得かぬ事なれど。玉と
いふ物を一目に見するが如き紀その。たゞ見ては。初その取出たる
他の玉も。たしかに見ずくずかすくして。たやすくそんはかりたる紀ふ
しまあるなり。又鈴屋大人のめでて。俚言に訳して示す時は。玉のあり
さまを。いとよく似て。書たがはざる石を以て示しためし。俚言ハ
詞もきひなれたる事。石は似も目によく見馴たる物にしあれば。一
目見るより。げにとんの底によくゆうかりなり。されば注釈といふ
物たのまんほどの初学なんすそ。かくまぎ上注に挙しる万葉考
一方にはかゝるまじき事なり。
と遠鏡との説ふと見ては。遠く見るがめくなれども。強ずよく
んゆる時は。同じ言におつる事なり。いづれの詞も今いふ所をよく

考へ見てしるべし。

だいしらず

松むし乃初こゑさそふ秋風は音羽山よりふきそめにけり

○秋風は音羽山にて松虫を吹そへける声をよめるなるべし。音羽山は山科にも清水にも此嚴の山にもあり。音羽といふ名所なりといへり。今思ふに。音羽山にて松虫を吹ものするといへるはすこしこまやかなるこゝろなり。松虫を吹する所は。いづくにても有ぬ。松虫の声をきくにつけて。山のけしきを見やりて感じけるをよめん方一首はさらなるべし。又音羽といふに付てよめるもあり。音羽といふを。松虫は音(コヱ)のはにかけたるにもあらん。声の中やかに見てよ。ふかき心にておもふべし古今夏に。音羽山今朝こえくれば時鳥梢はるかに今ぞ鳴なるとあるを。音羽山と云名を。紀氏の序にはなけれど。紀氏大人のいはれけるをも。引合せて思ふべし。かくて一首はきこえ。さてや此あたりにては松虫が鳴初るなるが。音羽山はあたりを見きかまてといふ秋のけしきに感ずるなり。さてはこの松虫の音を吹さそふ秋風は。彼(アノ)音羽山より吹初るよなどいふなるべし。其けしきいへるおもむきなり。

業平朝臣

ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくとかりにつげこせ

○今日おもふに。飛のぼる螢はかぎりもなく高くあがるさまなるが。雲の上まで往(ユク)にてあるならば雲上の雁に。世はもや秋風吹けりと。汝がわするべき時節ぞと告(ツゲ)て早く雁をおこせとなるべし。夜半(ヨナカ)ごか

夜いと涼しき端ゐして蛍の高く飛のぼるを見て。うちつけに秋風
ふきぬと覚ゆるにつけて。さる雁のくべき時になりけり。とくも来
なんと思ふまゝに。やがて蛍にことつてやるおもぶきまことに此
うたの詞づかひもあきらかなるべし。よく味ひみるべき事なり。
此哥。伊勢物語 四十五段 に云。昔男ありけり。人のむすめのかしづく。い
かで此男に物いはんと思ひけり。うち出んことかたくやありけん。
物やみになりて。死ぬべき時にかくこそ思ひしかといひけるを。親
きゝつけて。なくなくつげたりければ。まどひきたりけれど。死ければ。つれ
づれとこもりをりけり。時はみな月のつごもり。いと暑きころほ
ひに。よひはあそびをりて。夜ふけて。やゝすゞしき風ふきけり。蛍た
かくとびあがる。此男見ふせりて。「ゆくほたる雲の上まで云々。「くれ
がたき夏の日ぐらしながむればそのこととなく物ぞ悲しき」とあ
り。此人のむすめの事をかの物語なれば。説にはよりがたけれ
ど。時はみな月の晦日といふより以下は此哥のさまをしらんに便あり
て覚ゆれば引出せり。

よみ人しらず

秋風の草葉そよぎてふくなべに（古今六帖）（秋近く一本）ほのかにしつるひぐらしの声

○秋の夕方に。風が草葉にそよくとおとづるゝに随ひて（ナベニ）。ひぐらしの
声もほのかにきこゆるとなり。　ひぐらしは。和名抄に茅蜩。爾雅注云。
茅蜩。一名蠽（ヘ）子列反和名比久良之。小青蟬也とあり。我が吉田などにて伊勢蟬（セミ）
とも云て。伊勢の朝熊山などに多くありて。鳴声はこひくと聞ゆる
蟬を。ひぐらしなりといへど。何れにてもありけんにやしらん。又

虫によりところによりて也。今もたしかにそれぞとしらるゝ中にもいは
るべし。もとよりさしもしりがたき物にもあらざれども、おのれは
いまだたしかに知らざるなり。又かゝる物の名などは、其所々にて
彼是のたがひもあり。故に後世にこそはかしきものゝ、あひてその物
ぞとおし定めがたき事も多かるものなれば、今世にいふを以て、古への
にたしかに当てがたきや、あるはそれがらやはしりがたし。又かさね蝉の秋の
初よりそれはうふになく、其声はツクツクホウシと聞ゆるがあるをひぐ
らしなりといふものもあれど、それは和名抄にも、蛁蟟云、和名久豆久豆保宇之、八月ニ鳴者也。と別にみえたれば、もとより異物なるべし。かくて古今集歌
注に、夕方に鳴なりとあるは、さることなれども、拾遺雑上に、朝ぼらけ日
ぐらしの声聞ゆなりこやあけぐれと人のいふらんとも詠めれば、夕
方には限らざるよし、契沖阿闍梨いはれたり。されどひぐらしと
しも名におふせたるをおもへば、むかしより八夕方になくなるべし。

つらゆき

日ぐらしの声きく山の近けれや（是又六帖）鳴つるなべに入日さすらん（さしけん 六帖）

○日ぐらしと云を、日を暮さする虫にいひなして、末句ハ即その日をくらさする虫の鳴く山の入日影なり。三句、近けれやとハ、声きくといふよりいへるにて、深き意なし。一首の意ハ、日をくらさする虫のなく山が近きゆゑにや、なく声につれて即その山より暮ゆく入日影のさすなるよとなるべしと、我友竹村尚規いへりき。古今秋上、日ぐらしの鳴つるなべに日ハくれぬと思ふは山のかげにぞ有ける。近けれやは近ければにやなり。末句のらんは即此やの結びなり。此やの辞のうへ、まくいひほしけれど、まやの辞にまく

さくありて。つまびらかにいはんはうるさし。いとくすもそれぞ
畧なり。玉勝。五の巻廿葉以下を見て。よくわきまふべし。

よみ人しらず

日ぐらしの声きくからに松むしは名にのみ人を思ふころかな（青一本）

○日ぐらしも松虫も。ともに夕方に鳴出る虫の声を聞て。恋の情を催しけるを。上下にわけておきて。夕暮時と。待ことをきかせたるなり。古今三 恋 こえやとはおもはぬものから日ぐらしの鳴く夕ぐれはたちまたれつゝ。

心ありて鳴きもしつるか（くらすの文の一本）日ぐらしのいづれも物の憂きは（さ哭）うけまず（は一本又一本）

○今茅蜩（ヒグラシ）の鳴くをきくに。これも人の憂きものありて鳴くるなるの。秋の夕べを。誰もへの飽（アキ）て倦（ウレ）はしく思ふなるからなれバ。といふにて。日ぐらしの鳴をきゝて。我が憂きものあるべくて。思ひやり

するなるべし。一本に末句。秋をとある方をことふよく聞えて。縦も秋は物のうき時節なればといふことなれぞなり。四句異本に。物をとある方はおとるべし。

秋風乃ふきくるよひをきりぎりす草の根（むら）ごとに声みだれなり（新るなり 六帖）

○一首は宵のしめやかなり。きりぎりすは。和名抄に。蟋蟀。一名蛬。和名木里木里須。とありて。つゞりさせとなくといふものなり。○菅家万葉集。秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせとてきりぎりすなく。きりぎりすといふも同じ虫にて。俗にいとゞともカンナゴともいへり。秋の初めより野に鳴出るより。やゝ寒くなるにしたがひて。人の家にも。家の中。床の下などにも入来てなくなり。詩の豳風 七月篇 に。七月在野。八月在宇。九月在戸。十月蟋蟀入我床下といふめり。彼が鳴声のきりぎりすときこゆるによりて。きりぎりすとは名を

おふせたるにやあらん。若家万葉に、かりがねの羽風をさむみ促織(ハタオリ)の
管子(クダ)まく音のきりぎりすなると。あるもやゝ似たる事あり。万葉に、蟋蟀とかき
るを、皆古保呂木とよむべきよし。縣居大人のいはれたるによりて、
蟋蟀をこほろぎとのみよむ事と思ふはかたよれり。委くは、略解巻
十の上にみえたるを。ひらききえてさと
るべし。今も何れぞ此下にはさぶなり。

我のみやかなしきまりぎりす草のやどりに声たえずなく

○読人しらずなり。古今秋上、秋の夜のあくるもしらずなく虫は我が
ごと物やかなしかるらん。　我身を、此句、草のやどりにといへるは、
我が菴の宿にとぢこもり居る身を思ひよせていへるにもあら
んか。
らんといひしねどやるぬる秋の野に(ふし)待(人)まつむしぞ声(の)のせしき(さ 六帖)(夜 一本)
○此句、一本に待まつむしのとあれども、それは誤なり。それなりでさへ一首
としのきこえ。一首聞えがたければなし。朗詠集に、今こんと誰
たのめしん秋の夜をあかしかねつ松虫のなく。
秋の野に(我宿に 一本)来やどる人もおもほえず誰をまつむしこゝら鳴らん
○きやどるは、来て宿るなり。　おもほえずは、不覚(オボエズ)と云に近く。こゝ
らは、数多く凝連(コリツラ)なるやうの意にて、俗言に頻(シキリニ)と云
に近し。初句は、一本、我宿にとある方まさりてきこゆれども、こゝ
又の一本に、秋の野にと有る方多かれど、此方を誤なりとはすべ
からず。古今秋上、もみぢ葉の散りてつもれる我宿に誰をまつむしこ
こら鳴らん。こゝらといふ詞をそて多くとも。万葉に幾許などかけり。こゝら
ともこゝだくそこばくそこらなどもいひて、何れも物の数多き事に
ていひきこゆるの違ひあり。巨く等の字書と思ふの誤なる事は、契

仲法師も。縣居翁の大人たちもいはれたり。猶此詞下（雑三哀傷）にみえ
たるなどをも見合すべし。

秋風乃やゝふきしけば野をさむみわびしき声に松虫ぞ鳴く（免一本 山六帖）（虫ぞ鳴なる 六帖又一本）

○やゝ。漸（ヤヽ）なり。倍ゝワロく次第（シダイ）にといふ意なり。吹しけば。吹
しきれぞなり。（頻）下秋中に風寒み鳴秋虫のなみだこそとあるなど皆同じ。六帖。秋風のやゝふき
しけばきりぎりすうべもよなきぞ鳴音をかなしかるらし。末句は六帖まさ
一本などの方まさりざまなり。

ふぢはらの元善朝臣

秋くればのもせに虫のおりみだる声のあやをばたれかきるらむ（つゞる 六帖）

○のもせは。野も狭き（セ）ほどにといふ意なり。虫の声の野に満（ミチ）て聞ゆるを。
野も狭（セ）きといひなし。いと多く声の充（ミチ）て縦横（タテヨコ）に聞ゆるを。織（オ）り乱る

とはいへるなり。蒼家万葉。夕霧に声みだれまさる秋（の虫何ぞ思しき我ならなくに）。さて声の文（アヤ）を
綾（アヤ）といひなして。彼虫の織れる綾をば誰か着るらんとなり。二三
句は多ど秋の野にて鳴く多くの虫の音を。促織（ハタオルムシ）のこゝちにきゝてあ
らし。蒼家万葉。雁がねのまふすかずおとの衣をさむみ虫のおり着（キル）
衣をぞ假（カル）。野もせ。道もせ。庭もせ。又所せきなどの詞。皆狭きまで物
の充満（ミチ）るをいふなるよし。玉霰にみえたり。

よみ人不知

風さむみなく秋虫の涙こそ草葉いろどる露とおくらめ（の下露を 蒼万又一本）

○古今秋下。秋の夜の露をば露とおきながらかりの涙や野べを
そむらん。

秋風のふきしく松も山ながら波たちかへるおとぞきこゆる

○ふきしくは、何の吹しきるなり。信明集、「うちつけになびきは宿乃松
風をたよりに波のたつかとぞきく。
是貞親王の家の歌合に
○此伺書、家集には、松風を吟てとあり。奥本家集には今と同じ。
壬生忠岑
松の絲に風のしらべをまかせては竜田姫こそ秋はひくらし
○此歌の初二句、奥本家集には、松の声を、流布の家集には、二句あまり
ても一本には、風の心を、前家万葉集には、松之声緒風之調丹未句秋者
弾良咩とあり。今思ふに本集は、まじめても聞えざるにはあらねど、
初句のに文字と、二句のを文字とかはるみにおだやかならぬこと
ちするを、前家万葉集に「松の絲を、風のしらべにとあるは此よろしくの

中にてよろしかるべく思はるれば、此方に従ふべし。　かくて一首
の意は、松の琴の風にしらべかひて、高く低くもいろいろになるを、琴
は音に聞なして、さて竜田姫は秋をつかさどれば、此松風の琴をば
立田姫の弾なるべしといふなり。拾遺名「松の絲の声の琴に聞
ゆなりたかくせ見あげて風にまかすらし。守之集「日波のよりくる糸
を繰にすげて風にしらぶる琴むきの松。竜田姫を秋の神と申すは
て立田姫と申を神坐より云と。それに對へて。立田ハ奈良京の西に有
春によりて、佐保姫と云名を設けたるなるべく。佐保ハ東にあるを以て
しるきなるべきよし。古事記なるべく。奈良の京の此云出
記傳に二巻に見えたり。　又思ふに此歌立田姫竜田姫は、風の神
にておもすれば、秋風の松に吹よせてえならぬ音をたつるも、即此神
の情なるべしと、吗に思ひよせられたるにもあらんか。
秋。大輔が、うづまさのかどはるかなる家に侍りける時、萩の葉に文を

さしてつかはしける。

○秋とよく切て。大輔が云ことゝ心得べし。下（秋中にも此歌の詞の如）書あり。見合すべし。源ノたすくが女といへり。大輔ハ。保明親王の御乳母にて。但馬守うづまさ（太秦）ハ。京ノ二條通の西にて。洛外なり。此所を禹都萬佐（ウヅマサ）といふ初のよしハ。姓氏録左京諸蕃上漢の部太秦公宿祢の條に見えて。古事記傳三十三ノ巻に引出て。ことに委くいはれたり。草木などに文をさしたるとハ。むすびたる紙をたゝみまげて。枝などにむすびめを挿（サシ）むるを云。つけてといふも似たるやうながら。それは紙（カウ）よりにても糸にても。結び付るを云と。縣居大人いはれたり。

左大臣

山ざとの物さびしきは荻の葉のなびくごとにぞ思ひやらるゝ

○我宿の此荻の葉の此節の秋風に音するそてなびくの。いとさびしきたびごとに。山里はさぞかしと。その妹がすむ所の思ひやらるゝよとなり。太秦ハ京遠き所にハあらねど。城外なれば山里とハのたまひしなり。すべて山里とハ。別業山荘など。つねに山里といひならへり。

題しらず　小野道風朝臣

ほにもいで（出ず一本）ぬいかにかせまし（すべき又一本）花薄身を秋風にすてやはてん（はてまし又）

○穂にハ表にも出ぬハ。言ぬなり。世に身をうらんじて捨やせんと思へど。何となくうちまかするに。花薄も穂に出。秋風も吹頃になりて。ふと思ひ催されてよめるなるべしとありげに下ノ句。身を秋風にとある

秋に。我をうき身なりと。厭へる　なども此歌のやうにも聞ゆ。されど
心をかけよりとえたるなり。
ど猶思ふにこの歌の前に。初白き色をたるすは穂出たるを云
なるべし　出ぬき。出華にて。穂出に　あらざる事を論なし。　包める思ひなど。色に出て穂出れ。
言に出て穂に出の事を。穂に出づといへるは常にて。万葉三。風渡
せぬ明石の浦にともし火のほにぞ出ぬる妹に恋ふらく。古今三。恋　花
薄ほに出てこひば名ををしみ下ゆふひものむすぼほれつゝ。下二。恋
葉をわかみほにこそ出ず花すゝきしたには人にむすぼざらめやに。
大君集。花薄ほに出にけり我いはで人に知られてむすぼほれせ
ん。など猶多かりかゝれど。一首此歌は。見えずは包みたる事の。
穂に出れば知られ。現れバとても思ふまでにもなしがたし。今をいつに
かせん。色々やせん方もなき身になりければ。今は。秋風に薄の枯失(カレウス)
るがごとく。我身をも。いたづらにやなぶらかし果んと云歌のごとく聞ゆ
ふなり。かく見る時は。只白き。身を厭(ア)く事にかけたるにはあらず。薄の穂に出たるが。風に散失する。色よくの方にのみ云へるなり。
一本に。穂に出ぞとある方。まされりとはなけれど。かくては恋の心
なる事は。いよく うたがひなし。
ふかりける男に捨られたる女のもとよりにつきにけれバ。今一人が
よびきたる。
よみ人しらず
あけくらし守るたのみをかりせてたもとそぼつ乃身とぞ成ぬる
○田稲(イネ)の守(バン)にうしら人おかまへるかゞし(ソホヅ)の。朝夕守(バン)をして居る稲を。
人に刈取らせて後は。只一人跡に残て雨露にのみ濡(ヌレ)て居るがごとく。
我も。君をのみ頼みに。明暮守るに。其君を人にとられたれバ。今は一

人袖をぬらすのミ我身になりたる事よといふなり。又一本のかゝせ
つなれバ。令懸處の義にて。女我身をうち任せて。頼をかくるさま
なる中にも男もさやうに思ひするが。即たのみを令懸まするなり。
朝夕に。我に頼をかくるよしをのミいひなどする故にまことにさ
やうぞと思ひて。我こそ其方の頼の懸處よと思ひ居るに。思ひの
外に。今かく。徒そほづ我身となりぬる事よといふなり。　田実に頼
をかけ。稲の守をするかゞしに濡るゝ事をそほづといふ詞をか
けたり。そほづハ。古事記に。所謂久延毘古者於今者山田之曽冨騰
者也とある傳十二の六十四葉に。當時久延毘古と云しハ。即今の世に至るま
で。山田の曽冨騰とて有物是なりと云るなり。然れバ。久延毘古即曽
冨騰の事なり。さて曽冨騰ハ。後の歌に曽冨豆とよめる物にて。清輔

朝臣の奥義抄に。田におどろかしに立る人形なりといへり。古今
集に。足引の山田の曽冨豆己さへ我をほしといふうれハしきことと。
後撰集に。あけくれし云々。拾遺集長歌に。小山田を人に任せて。我ハ只。
徒そほづに身をなして云々。曽祢好忠集に。山田もるそほづもいまだ
なが免すれ舟屋形よるま穂さかえ見ゆめりなどよめり。名義ハ或人雨
露に所沾そほづて立る由なりといへり。今按に。曽冨豆といふも
後の事にて。本ハ曽冨騰なれバ。そほど人てふ言にやと見えたり。此そ
ほづの事をバ。細注にすべきなれど。例につける假字など。あまり
にちさく。見わきがたきやうになれバ。かく本注に引つゞけて書記
しつ。此類の事。上下の巻〻にも。まゝ小書
あるを。見ん人。凡例に考へ見となるべし。

返し

んをておかへる山田乃あれお種を君まもる採どかゝる人もなし

○耕作(ツクリ)する稲こそ刈る人もあれ。実(み)もなき稲をば、誰かきて刈(かり)侍らん。其
ぬしもなく刈田の後へ出る。ひつぢ稲のぬき身なれば、君が守り捨
ずとても、手をふるゝ人も侍らじと云て、かの一人の男につきて
ふる身を隠し遁まつるなり。　ひつぢは和名抄に、穭。音呂。後漢書穭讀於路賀於比。俗云
比知。自生(スル)稲也。とありて、一度刈る稲茎(イナクキ)より又葉の出る事も、又只
おのれから生ずる事もいふべき方なり。古今下。秋 刈れる田におふるひ
つぢの穂に出ぬは世を今さらに秋はてぬとか。六帖。秋 秋はてゝ人も
まもれぬひつぢ穂の我がからぞおひ出にけり。などよめり。

題しらず　　藤原守文

草のいと(ごとに一本)にぬく白玉とみえつるは秋のむすべる露にぞありける

○草の糸に露の玉を貫(ヌキ)たるとみえしは、細(サ)にもあらで、秋の結び
たる露にてありけるよとなり。　四句、むすべるとある本、初句の糸の
縁の語なり。されどこそ詞の縁のことにて、一首の意にかゝるす
じにもあらば。拾遺の方なるも、おけるといふべきも同じ事なり。下秋中にば、秋乃野の草は糸とも
見えなくにおく白露を玉とぬくらんともいえり。

後撰和歌集巻第五新抄

国立公文書館
National Archives of Japan